

東京国立博物館二五〇周年記念特別展「東京国立博物館のすべて」の楽しみ方

皿井 舞

皆さん、こんばんは。御紹介にあずかりました哲学科の皿井と申します。どうぞよろしくお願いたします。「国宝 東京国立博物館のすべて」という、東京国立博物館が持っている八九件の国宝全てを見せるという史上初の展覧会が開催中です。創立一五〇年記念という節目の年ならではのメモリアルイヤーとしてふさわしい展覧会が、今、上野の山の東京国立博物館で開催中ですので、その展覧会の概要を含めて皆様にご魅力を伝えできればなと思っております。

ところで、皆さん、もう既にいらつしやったという方はいらつしやいますか。よく予約が取れましたね。開幕が先週の一日ですので、まだ一〇日もたっていないですね。前期

の予約枠が全部完売しているという、ちよつとすさまじい状況になっています。これから御覧になる方に向けての指南、アドバイスも含めてお伝えできればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

今日は、スライドで御覧いただいているこの六点について、お話できればと思っております。まず、一つ目が「展覧会の概要と観覧のポイント」、それから、今展では国宝推しになっていきますけれども、「国宝とは何か」というところからお話しできればと思います。その上で「東京国立博物館が持っている国宝の特徴というのはどういうものか」というお話をして、それから、東京国立博物館の歴史は、日本の美術行政の柱と言っても良いと思いますので、

そうした歴史を紐解いていきたいと思います。その上で名品紹介と関連展示の紹介をして、展覧会・特別展を含めて今の東博を丸ごと楽しんでもいただくという、こうしたラインナップでお話しします。

まず、展覧会の概要と観覧のポイント。「国宝」はパワーワードで、誰しもご覧になりたいと思いますが、「国宝を全部見せます」といつても一度に八九件全てが見られるわけではありません。絵画、書跡、様々な分野の国宝がありますけれども、後ほどお話をしますが、「文化財保護法」によって一年間の展示期間は決まっています。なので、特に絵画や書跡といった、長い期間に光に晒されたりするとどうしても傷んでしまうような作品に関しては、一年あたり数週間の展示期間が定められているのです。日本の美術作品の展覧会は長く展示期間が取られていても、それが前期、後期に分かれていたり、さらにその期間が二つに分かれていたりするのは、作品を保護しながら皆様に鑑賞していただくという、相反する活動のバランスを取るためです。今展の会期は八週間ですが、全部で四期に分けられた展覧会になっています。

今回の「国宝」というキーワード。改めてこれが人の心をつつとつかむのだなと感ずることができました。というのも、私は去年度までは東京国立博物館で平常展調整室長という平常展、常設展のマネジメントをする役割をしていま

した。常設展でこの八九件を全て一度に見ることはできないのですけれども、一年間を通して東博の本館や敷地内のどこかの展示室では、何らかの形で国宝を御覧いただくことができるのです。常設展では御寄託作品以外は写真が取り放題だったりします。今回、特別展では写真を撮ってはいけませんが、それでもなお国宝に触れてみたいという欲求が非常に強いのだなと改めて感じたわけです。

この展覧会は二部構成になっています。第一部は東京国立博物館の国宝を全部見せます、というコーナーになっております。第二部が東京国立博物館の一五〇年。一八七二年を創立としてから今に至るまでの歴史を三章に分けて御覧いただくことができます。

会場は大きく二つに分かれておりまして、赤いゾーンが第一部。それから、緑のゾーンが第二部です。赤いゾーンの第一部に国宝が分野ごとに並んでいるので、構成自体は非常に分かりやすい。絵画、書跡、東洋書跡、東洋絵画、法隆寺献納宝物、刀剣、考古、漆工、これらが赤いゾーンにずらりと並んでいます。ある分野には国宝がないということに、もしかしたら気づかれる方もいらっしゃるかもしれません。考えながら見ていただければと思います。

第二部は東博一五〇年の歴史をたどるということで、先ほども申しましたように、第一章から第三章まで順番に、博物館の誕生から、帝室博物館として皇室と非常に近い

関係になった時代の博物館。戦後、国民の博物館として発展してきたその歴史と順番に御覧いただくことになりました。日本の美術館・博物館行政の一番コアな部分を順番にたどっていったら、そのまま日本の博物館の歴史を知ることができるといって、非常にコンパクトかつ知的好奇心が満たされるという内容になっています。

学習院大学の関係者の皆様に、ある作品を探していただきたいのが、この第二部です。学習院大学に非常にゆかりの深い、関わりのある作品が展示をされています。ぜひ会場で探してみてください。

では、このパワーワード「国宝」ですけれども、国宝とは何かというお話に入っていきたいと思います。そもそも国宝とはなにかということについては厳密に文化財保護法で定められています。文化財保護法は昭和二五年に施行され、現在も通用している法律として、私たちはこれに則っているいろいろな展示に関わる仕事をしているわけです。

この法律には、文化財の種類が定められていて、有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物、文化的景観、それから、伝統的建造物群。これらを総称して文化財と定められています。特に有形文化財の中から建造物を除いたものを「美術工芸品」と呼んでいます。これらの文化財のうち重要なものを国が指定して、選定、あるいは登録をして、重点的に保護するものが重要文化財です。

有形文化財のうち重要なものを重要文化財、さらに特に価値の高いものを国宝に指定して保護すると決めています。いきなり国宝に指定されることは、基本的にありません。重要文化財に指定されてから、さらにその中から特に重要なものが国宝にされるというステップを踏むわけなのです。

重要文化財の選定、指定というのはある手続がありまして、文部科学大臣が諮問するのは文化審議会ですけれども、その下部に専門委員会があり、ここで重要文化財にふさわしい作品を選定し、答申という形で文部科学大臣に上申します。こうした手続、厳格な審査を経て、指定が行われているというのを知っていただければと思います。

では、現在どれほどの数の国宝と重要文化財があるのかということですが、お手元の資料を御覧ください。現在（二〇二二年一〇月現在）、国宝は一、一一三件あります。重要文化財は一万三、三六八件です。重要文化財の一割ぐらいが国宝に指定されています。もっとも多いのが工芸品の刀剣ですね。書跡・典籍も件数としては非常に多い。

では、東博の国宝は全体のどれぐらいの割合でしょうか。東京国立博物館の所蔵品は約一二万件あります。この中で、ふだん常設展で御覧いただけるのは、約三割です。三割の作品でローテーションを組みながら、毎年毎年展示をしていくのです。そのほかは修理をしなくてはちよつと展示が

できない、あるいは展示をするのにはちよつとはばかれる作品などもあります。

一二万件あるうち国宝は八九件で、重要文化財は六四八件あります。この一二万件という所蔵件数は年々増えていっています。新しく作品を購入したり、あるいは寄贈を受けることがあつたりして、年々増えていきます。私が東博に来たときはまだ一一万台だったと思うのですけれども、今現在一二万件になっているところです。

全体をざっくり把握したところで、今度は国のジャンル区分に沿わせた形で東博の指定文化を比較してみようと思います。国の令和四年一〇月現在の国宝全件数、絵画は一六六件あります。それに対して、東博の絵画の国宝件数は二六件あります。これは日本の絵画だけではなくて、東洋絵画や、あるいは、法隆寺献納館に収蔵されている絵画も含めての数です。

彫刻について。東博は現在、彫刻分野の国宝を持っています。国宝の彫刻は全国で一四〇件の件数で、絵画に比べると件数があるわけですが、国宝に指定されている彫刻は、お寺の御本尊が多いです。

お寺の御本尊は、廃仏毀釈で仏像が廃棄されたり、なくなつたりしてしまつたとしても、それをきちんと守り伝えてきたお寺の方がいらつしやるわけです。ご本尊をややすやすと寺外に出してしまうことはなかったということがわか

ります。なので、今、東京、京都、奈良、九州の四国立博物館あわせても、彫刻の国宝はたつた一件しか収蔵していません。お寺や神社で大切に守り伝えられているものが多いということが、この数字からも非常によく分かるということになります。

それから、書跡・典籍は二二九件のうち二六件。東博の国宝件数で絵画と書跡・典籍とは同数です。

それから、工芸品。東博は工芸を細分化していて、それぞれ担当が決まっています。金工が五件、漆工が四件。それから、陶磁と染色に関しては〇件で、これも彫刻と同じように国宝がない分野です。ジャンルの特性によるものかもしれません。それから、刀剣が意外に多く一九件。それから木工が四件、考古が五件です。そして、これらを合計すると八九件となっています。それぞれのジャンルを順に見ていきたいと思います。

国宝一号「普賢菩薩像」は、東博の誇る絵画、名品の一つですけれども、最近修理がなされていて一月二九日から一二月一日までの短かい期間ですが、展示されます。国宝一六六件のうち、国宝絵画全体の一五・六%の二六件を東京国立博物館が所蔵していることになり、国宝絵画を最も多く所蔵する公的機関です。実は、戦前は国宝に指定されている絵画はまだ国宝になっていませんでした。特別展の図録に所収されている絵画・彫刻室長土屋貴裕さんの

コラムでは、国宝の指定も歴史的な経緯があるというお話をされています。戦前は皇室博物館ですので皇室とのつながりが非常に強かった。皇室の御物を国が指定するのはちょっとおこがましい。なので、国宝に匹敵するような作品をたくさん持つていったとしても、国宝には指定されていなかったのです。

新制の国立博物館になった時点で、戦前の皇室に関わる御物としてのお宝から、国の宝として認定されました。東博には戦前から様々な名品が集結していったのですが、特に平安仏画の名品が所蔵品としてこれだけ集まっているところはそれほどありません。仏画はどうしても手厚く保護をしなくてはいけない脆弱なもので、暗いところに展示されていて、目を凝らしてもよく見えないということが多いのですけれども、実は、よくよく見ていただくと、非常に美しい彩色、芳醇な彩色が平安仏画の最も大きな特徴の一つと言えるかと思います。経年変化で表面がすすで覆われていたりなどして暗くなってしまうのですけれども、もともとは非常にきれいなものです。

それから、東洋絵画。ふだんは東洋館という、敷地に入っ
て右手にある建物で見ることが出来ます。御覧いただいている「紅白芙蓉図」に関しては、今まさに展示期間中です。本当に馥郁とした柔らかな花びらの優しい感じが余すところなく表されているという、名品中の名品の一つで、南宋

時代に描かれたものです。

東博の東洋絵画に関しては、室町時代以前に中国から渡ってきた古渡のもの、江戸時代頃に中国からもたらされた中渡のもの、近代以降にもたらされた新渡と呼ばれるもの、その全てを所蔵しています。なので、東博の東洋絵画のコレクションは、古渡から新渡まで全部そろっており、日本の中国絵画コレクションの縮図です。「東洋書画精華」という毎年秋にやっている特集展示を見ていただければ、中国絵画の流れを御理解いただくことができます。非常に得難い企画になっていますので、また御覧いただければと思います。

それから、書跡。書跡の鑑賞の仕方はすごく難しく、書いてある内容が分からないかもしれませんが、字姿の美しさをまずは楽しんでいただけたら幸いです。小野道風は三跡の一人ですけれども、その道風のものに二点ございます。こちらは円珍が亡くなった後、智証大師という謚号をもらうときの勅書です。

書はなかなか分かりにくく、学生さんからも何を見ればいいのですかと聞かれることはあるのですけれども、今回の特別展では様々な時代の様々な種類の文書が並んでいるので、比較することができるといいう意味では、より良く勉強できる機会になっているのではないかと思いますので、楽しみを見出していただければと思います。書道をやっ

いる方々にとっては本当に垂涎の書がたくさん並んでいると思いますので、お楽しみいただけたと思います。

それから、「法隆寺献納宝物」という宝物の一群があります。法隆寺は、皆さん御承知のとおり、聖徳太子ゆかりの奈良のお寺です。斑鳩宮の跡地に建てられた、本格的な飛鳥時代の伽藍ですけれども、法隆寺も明治時代になった後、神仏分離令のあおりを受けて経済的に非常に困窮します。お金が必要であるため、宝物の一部を皇室に献上し、その代わりに奉加金を頂いて、修理などにお金を充てるということをせざるを得ないときがありました。法隆寺が建てられた飛鳥時代の宝物が、明治時代にごっそり皇室に献納され、戦後になってから国有化されます。そうした数奇な運命をたどっているのがこの法隆寺献納宝物という三〇〇件余りある宝物群です。

宝物という点、皆さんは正倉院宝物をすぐに思い浮かべるかもしれませんが。正倉院のご宝物は奈良博の正倉院展で展示されます。定期的に虫干しも兼ねています。その正倉院宝物は基本的には八世紀、奈良時代のもので。法隆寺の献納宝物というのは、それより一〇〇年前の七世紀のもので。七世紀のものが三〇〇件ぐらいままとまって残っている機関は、ほかにありません。

しかも、その法隆寺献納宝物は、東博の中の敷地にある「法隆寺宝物館」で常時展示されています。法隆寺宝物館

は敷地内左手の奥のほうにあつて、その存在を知っている人は少ないと思われます。いつでも拝観できるということはなかなか得難いことなのです。ぜひ見にいってみてください。その法隆寺献納宝物の一部が、今、特別展で公開されています。

宝物というのは時として移動することがあります。それが負っている歴史の中で価値が変わっていく、見方が変わっていくということがありまして、国宝や重要文化財というのももちろんそれぞれが指定される歴史的な背景というのがあるわけです。その価値というものは固定されて動かないものではありません。

考古のコレクションもやはり東博の博物館に収蔵される作品である以上、網羅性や通覧性や歴史性などを意識して収蔵されていることが多い。コレクションの形成史は、そのまま博物館の価値に直結しています。

今回の特別展で注目されているのは、何と言っても刀剣です。国宝の刀剣は一二件あり、東博の国宝に指定されている刀剣は、刀装具も含めて一九件あります。国宝全体の一五・二％。先ほど国宝絵画が国宝全体の一五・六％だったので、刀は絵画に次いで収蔵されている割合が大きいものの一つです。一つの博物館の所蔵件数としては日本最多です。刀ファンの方は必見です。

三条宗近の「三日月宗近」と通称される刀剣は、常設展

でもよく展示されますが、今回は八週間通期ですと御覧いただくことができます。国宝の刀を全部見せますというのがなかったのはいろいろなハードルを何とか乗り越えて実現に漕ぎつけた担当者の方の努力によります。

御覧いただきたいのは、ColBase（国立博物館所蔵品統合検索システム）の高精細な画像をもつてしてもなかなか刀剣の美しい波紋です。この「三日月宗近」の三日月という名称の由来というのも、その波紋なのです。三日月のような半月状の波紋が見えるように照明も調整されています。それぞれの刀の姿、形というのはもちろん時代によって違い、この「三日月宗近」は平安時代のちようど王朝文化の最盛期に作られたものですので、非常に優雅な曲線美が特徴的な刀の一つですけれども、鎌倉時代になるとそれが全く違う姿になります。ですので、先ほどの書跡と同じ様に、それぞれの時代の刀の特徴を一度に比較しながら見られるという非常に勉強になる機会でもあります。ただ、混雑しているので、人の頭しか見えないという状況にはなっているかもしれませんので、その辺りは少し工夫をしながら御覧いただければと思います。

次に第二部、東京国立博物館の過去に入っていくしたいと思います。創立は一八七二年、明治五年です。湯島の聖堂で博覧会が行われましたが、これを東博の創立と見なしています。そのときに出品されていた作品が、今、御覧いた

だいているこの錦絵に描かれているもので、何やら中央にお魚みたいなものが描かれています。そうしたものですか、あるいは、右手のほうには鳥の剥製みたいなものや魚が並んでいたりして、およそ今の博物館・美術館で御覧いただくような、そうした作品というものだけではない。非常に珍品が集結しているという、これが最初の博覧会です。

これです。真ん中に並んでいたのはまさしく名古屋城の金のしゃちほこです。ちようど明治五年は壬申検査が行われた年でした。壬申検査は日本で初めての文化財の調査だと言われているものです。明治初年に神仏分離、その後、廃仏毀釈がありました。片一方で歴史的に価値のある重要なものを破壊したり、あるいは海外に流出してしまうような危機的な状況に陥れることはよくないという認識に立ち、全国にどういった古物があるかを調べる壬申検査というのが行われました。その次の年、明治六年にウィーンで万博が開かれるのですけれども、そのウィーン万博に出品される作品の選定というのをも併せて行っていたのではないかと考えられています。

ここに写っているものは、当時、歴史的に重要なもの、古器旧物といったりしますが、造形的な美というよりは歴史的な証人と認識されていました。これらの一部が先ほどの湯島聖堂の博覧会になり、その一部がウィーン万国博覧会の日本列品所に展示されるということになります。

す。ここにありますしやちほこは、湯島聖堂とウィーン万博それぞれに分かれて展示されて、非常に人気を博しました。そもそも金のしやちほこを展覧会で美術品として展示をするという発想自体が、美術という概念がまだ確立していない時期で、非常に混沌とした状況を表しています。

大仏の頭は紙製です。船で運んで現場で組み立てようとした。トリエステの港に着いて、そこからウィーンまで陸路で持っていく。だけれども、開梱したときに火がついて、体が燃えてしまった。もったいないから顔だけ展示をしようというものでした。江戸時代に人気を博した見世物に類するようなものというのをごっそりウィーンに持っていくのが、この時代なのです。それから、視覚芸術に特化した作品に収められていくのが日本美術史の流れとなります。

博覧会の関係者はこういう方々です。町田久成は薩摩藩の人、幕府側ではない人が中心となりながら、ここには博物学者や、あるいは剥製を作る専門家、あるいは有職故実に詳しい旧幕臣の人がいたり、いわゆる旧派・新派それぞれの技術に長けた人を集めて博物館をつくろうとしたということがわかります。

湯島聖堂博覧会があった後、博覧会事務局や書籍館などが合併して、内山下町という今の帝国ホテルなどがある場所に一旦移転をします。そこで展覧会業務などをしたりし

ているのですけれども、もともと毛利藩のお屋敷を展示場に使っていたので非常に使いにくいということで、また後に上野の山に戻っていきます。この頃、町田久成は、人文科学だけではなくて自然史や産業なども含めた大博物館を構想していたのです。なので、古器物と言われる歴史的な物品だけではなくて、動植物、鉱物、農業、舶来品など様々なものが展示をされるという状況だったのがこの時代です。

明治一〇年に内国勸業博覧会が開催されるのですが、「美術品」と言われても、「美術」というものが誰も分らない状況です。例えば、近代彫刻の祖として有名な高村光雲は、まだその当時は東雲という師匠についていましたが、その師匠が弟子の光雲に「お前、何かを造れ」と言う。光雲は、「何かを造れと言われても、どうしよう。師匠のメソッドを潰してはいけないし、とにかく仏師としてふさわしい白衣観音を造ろう」と白衣観音像を造って仏像を出品しました。それが非常に評価をされて受賞した。ところが、元締めになっていた師匠の東雲が授賞式に行つてめでたしというエピソードがあるのですけれども。それはまさに近代以前の、江戸時代以前の師弟制度を反映しています。

芸術という言葉自体はまだなく、オリジナリティーを発揮して、新しいクリエイティビティの基に新しいものを造っていくという、そうした芸術観というものがまだない時代のものです。美術という言葉だけは西洋から入ってき

ていても人々の意識はまだそこまで近代化していない。そうした状況で何とか西洋化していこうという流れの中で、この内国勸業博覧会は「美術」というものを人々に認識を植えつけるのに役立ちました。博物館ができ、こうした内国勸業博覧会が開催されていく。そうした中で順次、西洋からもたらされた概念というのが整理されていきました。

こちらは「内国勸業博覧会之図」で、上野の山が描かれています。上野の山といえ、かつては全体が東叡山寛永寺の敷地でした。ただ、戊辰戦争の際に上野の山で戦争があつて、幕府側が壊滅的な負けを喫するわけなのですけれども、その境内地が新政府のほうに接収されて、そこが公園として開放されるに至るわけです。その途上で、寛永寺の本坊に当たるところに内国勸業博覧会の美術館が建てられている。これが後に今の東京国立博物館の本館になるわけです。

ジョサイア・コンドルというお雇い外国人が造つたのが、この旧本館です。内国勸業博覧会の展覧会場になったところで、それがそのまま東博の本館になります。そして、この上野の山で東京国立博物館の歴史が本格的に始まっているという、そうした流れです。

その間に博物館は内務省の所管であつたり、あるいは農商務省に移管されたり、あるいは宮内省に移管したりと、いろいろ省庁の所管が替わるのです。博物館をどのような

位置づけにするかという政府のもくろみをそのまま表している、それによつて、収蔵されている作品というのも当然替わっていくわけです。

明治一九年になって宮内省に移管して、ここで一旦落着きます。宮内省、つまり皇室と非常に密接な関わりのある博物館として、要は、帝国の美の伝統として位置づけられるのがこの帝国博物館です。明治一九年以降は、日本の為政者である皇室の美の象徴として機能していくことになります。

それ以前は農商務省所管です。町田久成の総合博物館構想がまだあつた時代なので、天産物という自然史系の部門で、キリンの剥製が展示されていたりするところがありました。このキリンさんは明治四〇年にドイツからやってきましたが、日本の気候は全く合わないもので、すぐに亡くなってしまつたらしいです。当時は今の上野の動物園も博物館の一施設だったので、キリンが亡くなると、それを剥製にして博物館で展示をしました。この水を飲んでいけるほうの左のファンジというキリンが、今、会場で展示をされています。これは東博の持ち物ではなくて、こうした自然史系のものは、今の科学博物館に移管されましたので、国立科学博物館の御所蔵のものです。果たしてこの大きなキリンをどうやって……。脆弱ではないか、振動に耐えられるのかどうか、多分輸送は大変だったと思います。

それから、鳳輦です。こういった総合博物館の構想があった時代の博物館から、宮内省所管となつて皇室の博物館になる中で、皇室ゆかりのものも収蔵されるようになります。現在の博物館では展示はしていませんけれども、帝室博物館時代の名残のある作品としては、この奥のほうに写っている鳳輦という輿があります。これも実物を見ていただく結構大きいもので、展示をするということで組み立て直して、清掃もしなくてはいけなかったらしいのですけれども、結構大変だったみたいです。

この鳳輦は、今の京都御所が再建されたときに、孝明天皇が内裏に向かわれるときに用いられたものだと言われています。

博物館初期は収蔵品があまりありませんでした。日本の美術の歴史を見せなくてはいけないというときに、実物はないけれども視覚芸術として何か作品を見せるためにはどうすればよいか考えた人がいました。収蔵品を充実させるために、模造を作ろうと。それを企画したのが、まさに岡倉天心です。当時、岡倉天心は美術部長で、なおかつ東京美術学校の校長も務めていた。名だたる名画、今、寺社、あるいは大名家にあるような、そうした名画や彫刻というものを模写模造して、それを展示に代えようと思いました。

大規模な模写計画事業が明治二三年頃に発議されて、模写模造がどんどん造られた。これは展示の充実がそもそも

の目的でしたが、その後、模写模造をすることによって古い技法や技術を知ることにも目的の一つとなりました。

この模写模造計画が発議されたちょうどその頃、岡倉天心は美術学校で日本美術史という美術の歴史を初めて通史的に見通した講義を行います。その講義に出てくるそれぞれの時代の名品が、まさにこの模写模造に反映されていて、日本の美術というのを通覧するのにふさわしい作品がピックアップされて、それが博物館の展示に反映されていくことになります。このときに初めて日本の美術の歴史というのが体系的にまとまっています。

なぜそういうことをしなくてはいけなかったのかというと、やはり近代国家として、殖産興業で産業などを盛り立てていくことは国家的に行われていましたけれども、それとは別に文化的な側面でも西洋列強に匹敵するような文化を持つている国なのだということをアピールしなくてはいけない。そのときに日本には、ギリシャ、ローマに匹敵するようなクラシックもあるし、そこから展開する美術の歴史というのもきちんとあるということを示さなくてはいけなかった。それを岡倉天心はフェノロサなどのようなお雇い外国人のブレインを従えているわけですので、そうした人たちの知恵を借りながら日本の美術史を紡いでいったわけなのです。それが展示に反映されていくのが、明治二三年以降のことになります。

今その一部が特別展の会場にも展示されていますし、それから、特集展示で本館でも特別一室・二室で、「東京国立博物館の模写模造」という展示をしています。この時代以降、模写模造がたくさん造られるのですけれども、それをほぼ全て見せるという企画で、一〇月末日まで展示をしています。近代美術史を専門としている人からしたら、喉から手が出るほど見たい第一級資料ばかりです。

これは表慶館です。東博内で最も古い建物です。本館よりも古いです。本館については後でお話をします。これは片山東熊という人が設計したバロックの優美な洋館です。これは、当時は皇太子なのですけれども、大正天皇の婚約を記念して寄附金により造営されたもの。ジョサイア・コンドルの旧本館と言われている最初の明治の内国勸業博覧会のときに造られた本館は、残念ながら大正一二年の関東大震災で大破してしまって、中の展示品もかなり損傷を被ったことが知られます。新しく設計し直して建設されることになりまして、渡辺仁という人が設計をした帝冠様式の建物です。

第三章は戦後に収蔵されたものを展示して、いろいろな作品を御覧いただくことができるコーナーです。全部を御説明する時間はありませんので、象徴的な作品を御いくつか紹介したいと思います。

コーナーの一番最後、要は展覧会の会場の一番最後には、

三メートル近い仁王像が展示されています。この仁王像は一番新しい収蔵品で、平安時代の一二世紀の仏像です。平安時代の仏像で、これだけ大きなものが購入できることはほとんどないのですが、こちらがなぜ東博にやって来たのかという点、もともと滋賀県の某地にあったのですけれども、昭和九年に歴史的な被害を出した室戸台風で仁王門自体が大破してしまって、そこに安置されていた仁王像も一緒に潰れてしまいました。破片になってしまっていたのを、そのお寺の御住職が全部集めて置いておられました。公益財団法人美術館という重要文化財や国宝の仏像を修理をする美術館さんが仏像の技法や構造を勉強するのに非常に有益だからと昭和四〇年になって御購入されました。美術館さんは展示施設を持っているわけではないので、手放すことを決断されました。

三メートル近くあるものですから、組み上げること自体がなかなか大変です。部材がかなりの程度残っているとはいえ、やはり組み上げると隙間が空いていたり足りないところがあったりします。美術館の方々が丁寧に新しい木材をはめ込んで、不具合がないように修理をしてくださいます。修理は一体に一年かかっているんで、全部で二年間かけて、去年（二〇二一年）ようやく東博にやって来たという、そうした収蔵品です。

この仁王像は室戸台風よりも前に一回、何か修理をしな

ければいけない状況になっていたことが痕跡から分かった。室町時代ごろに引き倒されてばらばらになるような出来事があった、それがどうもすぐには修理がなされなかったらしいのですけれども、なぜそれが分かるかというところ、木材の内側にシロアリが木を食べたような痕跡が残っているからです。それはばらばらになった状態で地面に捨てられていた時代が長かったようです。そこから一回組み上げられましたが、また昭和になってから室戸台風で倒れた。この仁王像は少なくとも二回立ち上がっています。

仁王像ぐらいのクラスのものが一回壊れてしまうと、それをもう一回復興するのは相当な困難ですので、それを二回も成し遂げられているというのは非常に稀です。平安時代の仁王像は片手で数えられるぐらいしかないのですけれども、これほどの大きさのものが数奇な運命をたどりながら今に伝えられているというのは、この先、文化財に対してどういうふうに向き合っていくのかを考えさせてくれるような、展覧会の一番最後にふさわしい作品だと感じました。

最後に名品紹介をいたします。

この「孔雀明王像」と「虚空蔵菩薩」は、いずれも平安時代の一・二世紀の仏画です。この時代の仏像は表面にレースをかけるように鍍金という文様が施されています。鍍金とは、髪の毛ぐらいの細さに金箔を切って、その毛筋ぐら

いの細さになった金箔を組み合わせて文様をほどこします。着ている服の上をまるでレースで覆うような、そうした装飾が施されているのです。それが平安時代の後期の仏画の特徴の一つです。まさしく作善といつて、仏様によい行為をして功德をもらおうという、純粹な信仰で、それを競い合うように施しているのがこの一二世紀の絵画です。

ただ、その精緻さを展示会場で見るのはすごく難しい。東京文化財研究所、上野の山の東文研と東博が東博の平安仏画を全部高精細の画像を撮影しており、東文研のサイトからその画像を御覧いただくことができます。それを見ていただくと、平安仏画の非常にきらびやかな美しさ、繊細さ、精緻さを見ることができると思います。

それから、絵画の瀟湘臥遊図巻です。今、肉眼ではほとんど認識できないような精緻な世界と言いましたけれども、この水墨の世界というのも今の時代なかなか分かりにくいと思いますが、水墨というのは、墨の濃淡で空気感、あるいは、奥行きというものを表しますから、グラデーションの微妙さは、ガラス越しではなかなか分からない世界です。

けれども、逆に、そのモノクロームの世界で自由に心を遊ばせるという高等な精神を持っていた人たちがいるという時代があるのだということを知っていただくのも重要かと思います。

「三条宗近」、それから、「童子切」です。東博の誇る国宝の中でも超有名な作品が非常に分かりやすい形で展示されているので、見逃してはいけないという二件です。ふだんから平常展でも展示をしていることが多いですが、二つ並んで比較してみることができるといふ点では、非常に得難い機会ではないかと思います。

紹介しきれないのですけれども、ぜひお気に入りの一点を探していただければと思います。

次に関連展示の紹介ですけれども、まず東京国立博物館の「模写模造」です。ケースの中の手前には「平清盛像」の模写があります。彫刻を絵画に写しているという不思議な感じがしますけれども、横山大観が描いた模写なのです。近代画家の技量というのが反映されているので、そうした視点でも面白いかなと思います。

それから、「未来の国宝」というテーマ展示をしているコーナーもあります。本館二室という展示室はふだん国宝室と呼んでいるところです。国宝の作品を一点展示し、ゆつたりと楽しんでいただくという空間です。今回、国宝八九点全部を特別展に出すということは、国宝室に展示する国宝がなくなってしまうことを意味します。展示期間は文化財保護法で厳格に決められています、各機関・所蔵館でも運用が決まっています。特別展に出してしまうと、平常展に出す国宝がないということになります。

今、国宝に指定されていないものでも大事な国民の宝はあるはず。文化財指定を受けていなくても、国民の宝があるはずで、それは学芸員・研究員の推せる作品を展示しましょうというのが、この未来の国宝のコンセプト。年度末まで月替わりでそれぞれの研究員の押し作品というのを御覧いただくことができるという趣向になっています。

それから、これがこの一五〇周年記念ならではの特集展示「つたえる つなぐ 博物館の広報のあゆみ」。広報室という情報発信する部署です。表にはあまり出てきませんが、でも、情報発信しないと来館者は困るわけで、ある意味、博物館業務の最も最前線にいる人たちがふだんやっていることをぜひ知ってもらいたいということで、この特集展示を組みました。大変スタイリッシュな空間になっています。そして、古いところから現在に至るまでの歴代のポスターを通覧することができると、ふだんとは違った趣向の博物館の側面を見ていただくという意味では、大変貴重な展示になっているかなと思います。

それから、最後です。「未来の博物館」という展示が開催中です。二〇一七年に、国立文化財機構の中に文化財活用センターというのが新しくできました。政府の方針に従って、文化財をより活用する企画などを行う組織です。単に見るだけではなくて、本来のその使われ方というものを思い起こさせるような、そうした鑑賞をテクノロジーを

使って実現してみましようという企画をしています。

例えば名物茶碗のレプリカを作って、レプリカを持ち上げると画面の中に高精細で撮った器の画像が映って、まるで自分が実際にそのものを触って眺めているような、そんな体験ができるというものです。

また、これは開発に関わっていたのですけれども、仏像をただ単に見るだけではなくて、どうしたら見るという行為を能動的に一步深めることができるかを考えました。調査を追体験するように懐中電灯に模したものを持って画面内の仏像画像に当ててみると、そこがクローズアップするようなどという、そうした鑑賞体験ができるというプログラムが開催中です。

本館特別5室では、8K3Dという非常に高精細な3D画像で法隆寺の救世観音像や東博の舟木本洛中洛外図屏風などを、細部まであますところなく楽しむことのできる展示がなされています。これは無料で入ることがあるので、特別展に行かれたら、ぜひ併せて見ていただくことをお勧めします。

まだまだお話ししたいことはたくさんあったのですけれども、いずれも一五〇年の展示にふさわしい作品が所狭しと並んでいます。もちろんそれは私たちがこの先の一五〇年に紡いでいくための非常に重要な布石かと思っています。この先、この未来にどのような作品が展示されているのかな

と、私たちは一五〇年後を見ることができないですけれども、一人一人の皆様がこれからの日本の宝を支えてくださるものと信じています。五分くらいしか残っていませんけれども、これで終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

(了)